

教授・学習11 (672~679)

座長 木下芳子・梶田正巳

- 672 教師—児童の Dyadic Interaction 分析の試み
明星大学 吉川成司
- 673 教師の対個人的言語行動と生徒の学力及び教師認知との関係
明星大学 塚田絃一
- 674 教師の経験差による教授行動の差異
広島女子大学 松田文子
- 675 小学校1年生の学級集団構造の変化—教育的働きかけとの関係における分析—
玉川大学 小林恵理
- 676 "Teaching is Learning" の実験的分析 I—1
中京大学 杉江修治
- 677 —2
名古屋大学 梶田正巳
- 678 集団における決定の方法
埼玉大学 木下芳子
- 679 学級内不適応児の特性分析 I—低地位児童を中心として—
東京学芸大学 田中克昌

672 : 杉江は interaction の記述をその始発者の発言とそれへの応答というような相互のやりとりを記述する形で行うことも考えてよいのではないかという意見を述べた。発表者は、教師発言に対する生徒の応答のみを分析しているので、どちらが先導的かは考慮していないと答えた。dyadic な関係とともに教師対学級集団という形でのアプローチも必要ではないかという杉江の指摘に対して、発表者は個人と学級全体への発言を総合して分析できれば、より生産的であるが、観察し、チェックする上での技術上の困難があると答えた。

673 : 梶田から、対個人と対学級全体への言語行動は、常に区別しうるかという疑問が出され、発表者は明らかに1人の生徒に向けられた発言だけをチェックしたと回答した。杉江は、生徒の参加量という観点からこの結果をどう考えるかを尋ねた。発表者は、対個人的言語行動の差異によって、教授・学習過程への参加量が異なっている。一斉学級の中でも、個人的相互作用のあり方によって、生徒の自発的活動、参加意識が促されると答えた。また、木下の、教師歴などによっても対個人的発言のあり方が変わるのでどうかという問には、経験のある教師では、言語的相互作用のパターンが安定していると思われると答えた。

674 : 杉江は、ベテラン教師と経験の少ない教師の教

授行動の差異を明らかにして、教授方法改善のマニュアルを作るのかと質問した。発表者から、究極的には、未熟な教師をいかに訓練するかという教授法の開発を目指す研究である旨の回答があった。梶田から、沈黙のカテゴリー(12)の質問があり、ここでは課題にシレバントでない沈黙、混乱であるので、考えている時間などは考慮していないと説明がなされた。

675 : 塚田から「社会図式的水準」とは何かという質問があり、下位集団の大きさを表わすものであるという回答があった。また、杉江より、グループ学者の活用程度について質問がなされ、名称はともかくグループによる学者はなされているとの説明があった。

676, 677 : 塚田より、教授活動を行った生徒の教授活動前の教える内容についての学習度や教授時間について質問があり、杉江から、個別学習での生徒の学習度はおさえていないこと、5分という教授時間は適切な長さであったとの回答がなされた。木下から、教授活動の具体的手続についての質問に対しては、教えた相手は同じクラスの者でペアはランダムに組み合わせ、能力ではコントロールしていないこと、教示は「いま学んだ事を教えなさい」というものであったことが付け加えられた。木下は算数では手続的な事を教えればよいが、国語では何を教えればよいかつかみにくい。「教えることにより学ぶ効果は教科で変わるのではないか」という意見を述べた。また、教授活動の効果の1つとして、monitoring が促されるという面もあることを指摘した。これに対して、梶田は、教科の違いによる効果や教授活動がいかなる心理的機能を促すかは、今後、理論的にも、実証的にも確かめねばならない問題であると述べた。田中は、教えられる側の生徒の効果について質問した。杉江は、教えられる側の効果はあるが、それを高めるには指導手続を工夫する必要があると回答した。

678 : 松田から配点するストラテジー(本)は、多数決というより少数者を考慮した方法ではないかという質問が出され、上位の者に高い配点をする(重視する)ので多数決と同じであるという説明がなされた。

679 : 塚田は、学級内不適応児と低地位者との意味の違いを質問した。発表者は、両者は同義ではない、地位指数が低くても相互選択関係のあるもの、友人もいて、成績がよくても心理的不安定を示すものなどがある。それらを含めて「学級内不適応児」としていると説明した。

(木下芳子・梶田正巳)